

太田陽子著

文脈をえがく

運用力につながる文法記述の理念と方法

ココ出版、2014年発行、325p.

ISBN : 978-4-904595-47-3

小西 円

1. 本書の目的と構成

本書は、著者である太田陽子氏が2008年3月に早稲田大学大学院日本語教育研究科に提出した博士論文『「運用力につながる文法記述」試論—モダリティ表現「ハズダ」の分析を通して—』をもとに、改稿を加えて出版されたものである。本書は「日本語教育に資することを目的に、運用力につながる文法記述のあり方と方法を教育現場から問い直す試みの一つ」(p. 1)であり、「ハズダ」というモダリティ表現を具体例に、「教育文法」とは何かについて答えることを目指している。緻密な調査に裏付けられた重層的な記述がなされている本書は、「教育文法」を考える研究者だけではなく、日本語教育の現場で「ハズダ」を教えたことがあるすべての日本語教師にとって、多くの学びが得られる良書である。

本書は7章から構成されている。1章では、これまでの文法意識の変遷を概観し、現行の問題点を洗い出したうえで、教育文法の理念について述べている。2~4章では、その問題点を「教材」「学習者」「教師」の3つの側面から調査・分析している。5~7章では、「ハズダ」の具体的な文法記述を行い、著者の教育文法の理念の具現化を行っている。また、付属のCD-ROMには3章の調査で収集されたデータが収録されている。

本稿では、2節で本書の概要、3節で本書の意義と課題について述べる。著者は、ハズダというカタカナ表記で、文末または句末の、非過去形かつ肯定形で使用されている「はずです・はずだ・はずなんです」等を代表させ、それを主な分析対象としている。以下、本稿もそれに倣って表記する。

2. 本書の概要

2.1 日本語教育における文法意識の変遷

1章では、これまでの日本語教育において「文法」がどのように位置づけられ、どのような問題意識の中で研究され、発展してきたのかについて、1970年代~80年代の日本語教育における文法観から2010年前後の研究成果までを対象に、丁寧に分析している。

その中で、著者は、「すでに表現された言語現象を解釈的に分析した日本語学的な記述は、動的な言語の運用を「その表現をどう使っていくか」といった観点から切り取ることに成功していない」、「何を教えるか」は、研究者やテキストが固定的な形で取捨選択するのではなく、学習者が学習者の環境において選択していくべきであり、それを支援する文法記述がいまだに十分ではない」(p. 48・49)という問題点を指摘し、自身の主張として「「文法」をコミュニケーションと切り離し、コミュニケーションの後に整理と体系化を行うための補助手段として考えるのではなく、コミュニケーションのまさにその中に文法を見出すべき」であり、「文脈」・「意図」・「場面」をも対象として「文法」を記述していく姿勢が必要」(p. 49)であると述べており、これが著者の教育文法の理念となる。

2.2 「教材」「教師」「学習者」の3つの側面からの分析

2章から4章は、現在の文法教育にはどのような問題点があり、何が足りないのかについて、教育現場からとらえ直していくことを試みている。著者は、分析対象としてハズダを選択した理由として、ハズダが初級後半から中級前半の文型項目の1つとされながら、実際の使用につながりにくい形で提示されている典型的な例である点を挙げているが、2章から4章の分析では、「教材」「教師」「学習者」の3つの観点からその実態があぶりだされる。

まず、2章では「教材」の分析が行われている。ハズダに関する先行研究を概観し、その議論を背景とした上で、教科書や教材でハズダがどのように提示・練習されるのかを調査している。分析対象は、教科書・文法教材29種、教師用参考書・文法書22種にのぼる。その結果、現行の教科書や教材では、「根拠に基づく判断」といった意味と形を理解するための説明や練習にとどまり、形態的にも「(根拠)から、(判断)ハズダ」という表現に偏っていること、また、「どんな状況で、どのように」用いられるかといったコミュニケーション上の機能や、「どんな人物が」といった話し手の資格等には十分注意が払われることなく、用法が未整理のまま、機能も不明確な練習となっていること、類義表現との使い分けの視点も不十分であることが明らかになった。

次の3章では、学習者が学習過程においてハズダをどのように理解し、運用上、どんな点に困難を感じるのかを明らかにしようとしている。日本語学習者291名(中国、韓国、マレーシア、ベトナム等)と日本語母語話者147名に対して、ハズダを用いた1文作成タスク、会話作成タスク、100~600字の意見文作成タスクを行い、その収集データを分析対象としている。その結果、1文作成タスクではハズダという表現の意味を理解していると思われる学習者でも、会話場面の中で運用しようとするとき適切に使用できないことがあることがわかった。また、意見文作成タスクからは、母語話者や学習の進んだ学習者に見られる文章展開のパターンが、運用力が不十分な学習者にはうまく使えていないということも観察された。調査のフォローアップインタビューからは、「ハズダの基本的な意味と使い方をわかった上で、習った通りに、自分なりに運用した結果」(p. 105)、不適切な表現を生んでしまうという事例が複数挙げられている。その結果として、著者は「ハズダという表現の使用される文脈的条件、特にハズダを用いて何をするのかという発話意図をもっと重視」(p. 129)することを改めて提案している。

4章では、「空が曇っているから、雨が降るはずです。」という文を例に、教師がどのような訂正を行うかを、日本・韓国・マレーシアの日本語教師を対象に調査している。その結果、文型の意味に頼った説明だけでは解決できない問題があること、それにもかかわらず、教師は誤用訂正において文型の意味にのみ着目する傾向があることがわかった。著者は「空が曇っているから、雨が降るはずです。」の不自然さの原因を、意味ではなく「文脈」という極めて語用論的な問題」(p. 147)と位置づけており、著者が主張している「文脈」の記述がなければ、ハズダの適切な運用ができないことがわかる。

2.3 運用力につながる文法記述の試み

1章における理論的背景の記述と、2章～4章で明らかになった調査結果をふまえ、5章では、運用力につながる文法記述に必要な観点が模索されている。著者は、現在の文法記述の問題点として、①「どういった人物が」「どういった人物に対して」「どんなときに」「何のために」その表現をもちいるのかという文脈的な情報から切り離されていること、②共起表現や文章展開を含め、「使える形で」の提供がないこと、③類義表現との使い分けが、基本的な意味からのみ説明され、広い範囲の類義表現の中から「なぜその表現を使うのか」を自分で決めるための情報が少ないこと、という3点を挙げている。それを受けて、著者は改めて、運用力につながる文法記述には「その表現をどう使うのか」といった観点から、コミュニケーションのまさにその中に文法を見出すことのできる記述、意図や場面、文脈といったことをも対象として文法を記述していくという姿勢」(p. 155)が重要であると説き、そのために「機能をもとに文脈をとらえ直し、文脈を明らかにしていく作業」(p. 155-156)が必要であると述べる。「文脈」という概念は、本書の主張する文法記述の核となる部分であるが、著者は多様な先行研究を概観したうえで以下のように定義し、このような「文脈」観に基づいてハズダの記述を行うとしている。

「文脈」とは、話し手の表現、および、聞き手の理解に関わる言語的・非言語的要素の総体である。また、「文脈化」とは、特定の文法項目の産出活動のために、「文脈」的な要素を必要な範囲で抽象化し、当該表現の「意味」が、どんなときに、どのように、誰から、誰に対して用いられ、その結果、何を行うのか、を通して記述していくことである。(p. 162)

また、ハズダの「基本的意味」について、著者は「自分の現在の認識で判断すると当然こうだ」と話し手が思考過程内に抱いている命題内容を提示すること」(p. 170)と規定する。ハズダが使用されるのは〈認識〉と〈現実〉を対立的にとらえ、そこに何らかの距離がある場合であるとし、「現実の状態が未確認」「現実の状態が確認済みで、〈認識〉と〈現実〉が一致しない」「現実の状態が確認済みで、〈認識〉と〈現実〉が一致する」という3つのパターンを挙げている。そしてハズダの使用文脈を【〈認識〉と〈現実〉の関係】【話し手の命題に向き合う態度】【ハズダの機能】【伝達効果】という概念で分類し、図1のように提示している。図1で示された全体像は、本書の2つ目の核であるといえよう。

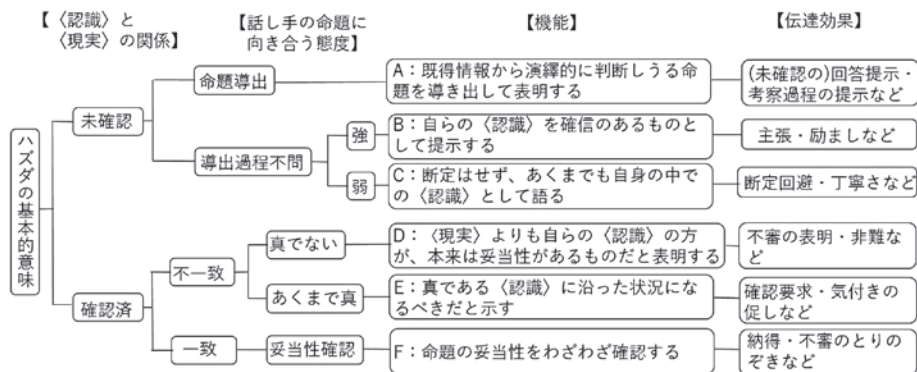


図 1 ハズダの文脈化全体図 (p. 191 の図 5 参照)

6章では、上記の図に基づいて、【<認識>と<現実>の関係】【話し手の命題に向き合う態度】【ハズダの機能】【伝達効果】の詳細な記述が、共起表現や例文を伴って行われている。また、【伝達効果】は聞き手との関わりの中で生じるとし、図 1 に加えて【聞き手との関係】も記述されている。分析は文末・非過去のハズダを中心に行われているが、そのバリエーションとして、ハズガナイ・ハズダッタ・ハズジャナカッタ・ハズノ N・ハズダカラ・ハズナノニ・ハズガ・ハズ。(ダを伴わない言い切り)の 8 つの表現についても観察が行われている。

著者は 6 章の記述を「運用力につながる文法記述のための基礎研究」と位置付けているが、7 章ではそれが文法解説試案として再構成されている。イラストなども用いられ、「教師がハズダについての全体像を確認し、授業の準備の参考にするという利用法」(p. 231)を想定した記述であると述べられている。その内容は、「1. 形の情報」「2. 基本的意味と運用の全体像」「3. 使用文脈 (現実との関係/話し手の表現態度/伝達効果、会話例とその平易な解説、その文脈においてよく使われる共起表現、その文脈における類義表現との関係)」「4. 表現のバリエーション」「5. 書く練習のために」「6. 教室活動のためのヒント」という 6 項目からなり、「3」の部分に機能 A~F の詳細が含まれている。文脈の丁寧な提示や、類義表現との関係を把握したうえで学習者が表現を選択できるようにしている点に著者の主張が読みとれる。また、会話と意見文の両タスクの分析を経て、対話での使用と文章での使用を分けて考えたほうが良いという著者の主張から、「5」が記述されている。

3. 本書の意義と課題

著者も 1 章において指摘しているように、近年「教育における文法記述」については様々な議論が行われている。そのような状況において、「教育における文法記述のあり方」に正面から向き合い、多様な角度からの調査に基づいた分析を経て、丁寧で重層的な記述を行った本書は、「教育における文法記述のあり方」の理念を具現化しようとした意義深い書であるといえる。小林 (2009) は、「日本語教育がコミュニケーション能力の教育であるのなら、具体的な状況の中に埋もれた状態で、言語事実をじっと観察し、そのありようを記述

していくことが必須である」(p. 36)と述べ、その成果を「混沌とした、整然さとは対極にある様相を呈するものとなるだろう」(p. 36)とした。無限の広がりのある文脈を、ハズダの機能という観点から整理して記述した本書は、混沌の中に整然さを見出す、その具体例を鮮やかに示したといえる。これらの記述は、文法記述の専門家であり、同時に経験豊かな日本語教師でもある著者の深い考察の賜物である。日本語教師としてハズダについて考えたことがある者であれば誰しも、その考察の奥深さを想像することができるだろう。

しかし、欲を言えば、その記述手法がどのような文法項目にも当てはまるのかについて、著者による洗練された具体的な記述例がほしい。著者は、「いかなる「文型」も「文脈」の中に位置づけて扱われるべきである」(p. 273)と述べている。本書で取り上げられたハズダは命題の外側にあるモダリティであるが、命題内部に関わる文法項目にも【話し手の命題に向き合う態度】や【伝達効果】が記述されるのだろうか。また、文法項目によって文脈化の記述方法が異なるのであれば、その実例をぜひ示してほしい。

また、著者自ら、本書の課題とその展望も述べている。1点目は、文法記述の説明の多くが抽象的であり、基礎研究の域を出ていない点である。実用化にむけてはまだ工夫が必要であるとしつつも、著者は「教育内容は、実際の運用を緻密に観察し、文法的な分析に裏打ちされたものであるべき」(p. 263)だと主張している。2点目は、ハズダという文法形式を記述の見出しとしている点である。筆者は、コミュニケーションにおける言語の運用を、話し手が発話の意図をどのような表現形式と表現方法を用いて実現するかという面からとらえるなら、文法記述もまた、意図から出発して項目を立てるべきではないかと自問し、それに対して、将来的に記述がデジタルリソース化されれば、文法形式からも発話意図からも参照が可能になると予想している。3点目は、「基本的意味」を設定する必要性についてである。本書における分析においても、抽象化された意味が、学習者の運用や教師の誤用訂正を誤った方向に導いていたことが明らかになった。それにもかかわらず、「基本的意味」を設定した理由として、著者のハズダの記述では「基本的意味」の設定の仕方、位置づけが工夫されている点、学習者個人が当該表現を創造的に応用していくときに「基本的意味」が援用できる点を挙げている。著者に認識されているこれらの課題に対して、著者の今後の研究によって、より良い着地点が与えられることを期待したい。

多くの日本語教育関係者が「教育文法のあり方」について考えることこそ、著者の望むところであろうと思われる。本書は、そのきっかけになり、そして、多くの重要な気付きを与えてくれる良書である。

参考文献

小林ミナ (2009) 「文法研究と文法教育」 小林ミナ・日比谷潤子編『日本語教育の過去・現在・未来 第5巻 文法』 凡人社、pp. 17-38

(こにし まどか 国立国語研究所)